ある秋の日の対話

群れ飛ぶトンボたちの
気まぐれな一匹が
揺らめく心の旋律をたどって
大気に浮かんでいる
大気におどけた軌跡を残してゆく

ああ、空は高い
めまいがするほどに昇ってゆく―――
現実が僕を追い越してゆく
真新しいフルートさえよそよそしく黙り込み
僕は取り残される

トンボが舞う軌跡は
そのまま、紡がれた歌への侮蔑となって
ただ消失してゆく
トンボが棒の先で休むとき
歌もすでに軌跡とともに消失している

「単なる装飾さ、お前の歌は」

捨て去ること
捨てられてしまうもの・・・
その両者の間には何が横たわるのか
お前が知っているとでも？
お前の複眼には見えるとでも？

「歌え、さあ歌ってみろよ」

群れ飛ぶお前達はあとどれほど生きるのだ
お前達の飛行はあまりに気ままじゃないか

「歌えぬなら、踊るがいい」

くそ、僕達は上品過ぎる・・・

(2001.9.30)